

## 編集室から

明けましておめでとうございます。旧年中は大変御世話になり、誠に有り難い事였습니다。本年もどうぞ、相変わリませずご縁を結ばせて頂きたい、何卒宜しくお願ひ申し上げます。

毎年未、何処のご家庭でも恒例となってくるのが年賀状の作成でしょう。我が家では、気の利いたイラストを自作できる家人が居らず、書店に並ぶ干支のイラスト集を毎年購入しています。1点か2点しか利用しないイラストのために、ワンコインほどとは言え、書籍を購入するというのも、大いなる無駄な気も致します。ですが、全く齒が立たない技ですのでこれもまた致し方ないと観念しています。

その我が家の年賀状作成のときでした。ふと、1点のイラストが眼に飛び込んできました。今年申年です。数多くのイラストの中には「申」の文字を使ったものも少なくありません。眼に飛び込んできたイラストは、申の文字と猿のシルエットで構成され、何故か「神」という文字に見えたのです。



「神」は、示 編に「申」。しめすへんの「示」は、神様への捧げものを置いたテーブルの象形なのだそうです。このため、示編が伴う漢字は、神に関する文字となっているようで、そういえば「祝・礼・社・祈」などの漢字が思い起こされます。

12年で一回りする干支自体に吉凶はありません。申年の今年が特別な訳ではないのですが、新年を迎える時期での出来事に何故か有り難い心持にさせて頂きました。

みなさまにもどうぞ、善き一年になりますように、謹んでご祈念申し上げます。(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川島さんが「能登の夜市」の姉妹店を開店されました。上京された際、ご利用になってみてください。もちろん、川島さんご自身もお店に立っておられます。

日本酒バルChintara  
03-6427-8183  
17:00~24:00  
金曜17:00~28:00日曜祝休  
渋谷区道玄坂2-19-3  
ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2016/01  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>  
〒920-1167  
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217  
Fax 076-233-7375  
Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2016/01  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

# 謹賀新年

# 睦 月



白山比咩神社にて  
by hama

新しもの好きの私。新しい年は果たして何に飛びつくだらうか。

もう半世紀も前にロジャースが提唱したイノベーション理論。流行が普及する過程で、それに対する消費者の意識や行動を分類したもので、5パターンある。私の超訳(?)を付けて紹介する。

イノベーター(全体の2.5%)：超がつく新しもの好き。革新的だと感じた商品やサービスにすぐに飛びつくが、便益には無頓着。それが普及しだすと興味はなくなるなど、社会とのつながりはあまり意識しない。

アーリーアダプター(13.5%)：新しもの好き。革新性そのものにも敏感だが、それよりもむしろ、流行の先取りに価値を見出しがち。常にアテンナを張り、見つけるといち早く試して周りに発信したくなる。

アーリーマジョリティ(34.0%)：新しいものに慎重。流行に敏感な人が飛びついたことを確認してから自らもその商品やサービスを試す。平均よりもちょっとだけ早いことに喜びを感じる。レイトマジョリティ(34.0%)：新しいものに懐疑的。まわりの大多数が使用し始めたという確証を得てからそこに踏み出す。選ぶ基準として、流行っていることがとても重要な要素。

## 濱のつばやき 『贈り物』

ある日、書籍小包が届いた。最近、書籍もネット注文をする機会が多く、最初はそうかと思っただけ、心当たりが無い。よく見ると、送付先を書いたシールに小さく【謹呈】著者代送とあった。

昭和9年生まれ歌人叢書7とシリーズ名が付された書籍名は「春蘭咲きて」。知人の東野さんのご本だった。東野さんとは、能登空港開港前のモニターツアー以来のご縁を頂いているが、誠に失礼ながら短歌集である本書を頂いて初めて歌人であられること、本書が三冊目の歌集であることを知った。

本を読むとき、「はじめに」の次に「あとがき」を読み、その上で本文を読み始めるといふ癖がある。何気なく読み始めた著者ご友人による巻末の「解説」。そこには、「ご主人さまが病の末に亡くなられた頃、作品から始められていること。そしてその代表作として一首が紹介されていた。」

しんしんと襲ふ哀しみ五十年つねに保護されて生き来しわれか

三十一文字という。この僅かな文字の中に籠められている万感の想いに、不用意に重なる言葉は見つからない。

ラガード(16.0%)：最も保守的。流行への関心が薄く、それが常識的になるまで採用せず、最後まで不採用を貫くことも。特に便益という視点において、従来型の商品やサービスから変えることの正当性に疑問を持つ。

現代はロジャースの時代よりも、社会の伝播性や同調性が増しており、また越えられない大きな溝「キヤズム」がムーアによって主張されるなど、イノベーター理論が当てはめにくいケースも指摘されている。アーリーアダプターとアーリーマジョリティでは商品購入の動機が大きく異なるため、この間に大きな溝「キヤズム」があるというものだ。

これを超えるには、マーケティングアプローチを変えることが必要とムーアは言う。「新しい」ことに価値を求める層と、「便益と安心感」が重要と考える層とは、根本的に売り方を変える必要があると。プロモーション手法を変えることやアーリーアダプターによるSNS等での拡散も考えられるところだ。

私は、革新的テクノロジやライフスタイルを変えるような製品・サービスには敏感なつもり。そして、その価値をまわりの人たちに広げたいくせに、飛びついたものが普及していくとつまらなくなるといふ面倒なやつでもある。

注：ロジャースは普及率16%(+ )に達すると需要が加速すると説いたが、ムーアは「キヤズム理論」によってそうならないケースを提唱

自分もかつて、思春期によく歌を詠んだ。それらは今では古びたノートの中で眠っている。人生は、想い出という名の「感情に満ち溢れた記憶」そのものなのかも知れない。

日常は、何気なく通り過ぎてゆく。そして、しかしそれらの時は二度とやっては来ない。

一瞬一瞬が二度と繰り返し得ない貴重な宝物であると腹に落として生きる人と、そうは知りつつも時の流れに流されて生きてしまふ人との記憶の一片の重みは、自ずと異なるものとなるのだろう。

人は、独りでは生きられない。それは誰しもが知っている。が、誰しも深く分かっているものでもない。一度しかないご縁、日常的に続くご縁。

どちらにも優劣なく、貴重な一瞬の積み重ねであると肝に刻んで、この一年の明けをまた、言祝ぎたい。



## 『食堂業態が担う地域での新たな役割(1)』

株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

現在私は「食堂」という業態に非常に興味を持っております。

ここでいう食堂とは

「食堂は『主食を主体に比較的安価で様々な料理を食べさせる店』と定義する。

“大衆食堂” “めし屋” “お好み食堂” などと呼ばれ、日本標準産業分類では「一般食堂」となっている。

食堂は家庭料理的な食事を提供する店であり、サラリーマンや学生を中心に気軽に廉価で食事できる場として、

一般大衆に幅広く支持され、高級な日本料理店・西洋料理店・中華料理店などとは一線を画すもの」

というものです。つまり昔どの街にもあった優しいおじちゃんとおばちゃんが家族で経営していたような定食屋のことです。

今回は2回に渡って、食堂という業態について現状の整理と新たな方向性、そして私が考える食堂のあり方について書きたいと思います。

1.現在食堂を取り巻く環境はあまりよくありません。

(1)売上・利益の減少が顕著

客数の減少が最大理由。

外食業態全体が平成15年と平成20年対比で約1%市場が縮小しているのに対して食堂と言う業態に限れば5%以上売上が減少していると回答した店が60%近くあります。

(2)継承者がいない店が65%

売上の低下という食堂のポジション低下が継承問題に更に拍車をかけているのだと思われます。

(3)今後の取組のうち「廃業」と回答した方が全体の35%

経営者の平均年齢が62歳であることと、継承者の不在が大きな要因だと思われまます。

2.そんな食堂は可能性があるのか?

(1)外資のファストフード一辺倒からの見直し機運

大手ハンバーガーチェーンの大苦戦からもわかるように1970年代からはじまった外資の大手によるチェーン攻勢に対して、そろそろ日本人もNOをつきつけつつあります。

「食材も作る人も顔が見える方がいい」、「カジュアルでも子供に本当に美味しい食事をさせてあげたい」

1960年代のような、気軽に食べられる日本のファストフード = 食堂が見直される時代に来たと確信しています。

(2)食堂がその街を支える重要な地域資源である

高齢化社会、多様な働き方、コミュニティの再構築が求められる現代社会において、食堂は正に、“食”という機能を提供する地域の重要なインフラです。

食堂は従来

- ・高齢者宅への食事の出前。
- ・子供がいる母親が子供を連れて出勤できる。店のじいさん、ばあさんやお客さんと子供の面倒をみる
- ・地域の催事や祭りの集会所やスタッフの食事提供

という役割を担ってきました。

つまり、現代の社会的問題を解決できる処方すすでに持ち合わせていたのです。私が考える食堂は「地域と一緒に高齢者や子供を見守る食堂」を目指すため、お母さん世代やセカンドキャリアを考える中高年層に対して、多様な働き方や独立支援などを提案していきます。

(3)“食”集積地

一日平均約150人ものお客さんに食事を提供する食堂は、食材の集積地でもあります。毎日市場や地方から届く新鮮な食材は、家庭の食事需要にとっても魅力的なコンテンツでもあります。そこで、「店」という容量が限られた箱ビジネスにとらわれない“食のライフスタイル提案”という概念が考えられます。

単にテイクアウトの中食ということだけではなく、

- ・持ち帰り時間の予約制による出来立ての提供
- ・食材の定期配達
- ・料理教室(父の料理教室、子供向けの魚を知ってもらう教室)

など、地域の豊かな食生活を支援するのが私が考える食堂の未来像です。

(4)歴史をつなぐ庶民の味

最近私の地元能登で小学生の頃からよく通っていた食堂が立て続けに閉店しました。人口減少が激しい地域でよくここまで頑張っていたら、感謝感謝しかないので自分の子供たちに、「父ちゃんが小さいころ、風邪ひいたらここの卵うどんをばあちゃんが持ってきてくれたんだよ」という話をしたかった。家族の歴史や繋がりを再確認するという場が食堂だったりするのです。

やや感傷的な部分ではありますが、この食堂が持つノスタルジック感こそ何よりの事業の継続性において重要なファクターであると感じています。街の人に愛される食堂という風景は、その街の魅力にもつながります。50年後もあたりまえのように存在することが、私の一番願う姿です。



『富士の国から ~大魔神のたび~』ななつ星同窓会12.17(その1)  
静岡県小山町まちづくり専門監 溝口 久

ななつ星in九州の旅から早2年が経った。「『新たな人生にめぐり逢う、旅』をテーマにしたクルーズトレイン。この旅を通じて皆様が巡り逢われたもの全てが、これからの皆様の人生にとってかけがえのないものとなりますよう、願っております。」がJR九州社長のこの列車の旅に込めた想いだ。

そのJR九州から同窓会の案内が届いた。「え、そんなことやるのか！」相当に驚いた。もちろん、すぐに出席の返事を出した。300人定員に入らなくてはと、先の予定を顧みずに、いよいよ当日が来た。

会場が当初予定されていた八芳園からホテルニューオオタニに変わっていた。何でも希望者が多くて入りきれなくなったとのこと、抽選にせずに会場を代えてまで受け入れようというJR九州の姿勢がうれしい。

ななつ星に乗った時に作ったスーツを着て臨んだ。ただ、当時78キロの体重は残念ながら維持できず4キロオーバー、タケオキクチのスーツがきつい。案の定、ななつ星のスタッフからは「少し肥えたのでは？」と言われた。受付開始の10時30分に着いたら既に多くの人が集まって、華やいだ雰囲気が溢れていた。すぐに一緒に初便に乗り合わせた26人の内の廣郡さん御夫妻に会った。受付でいただいた席次表を見ると一番前でしかも中央のテーブル、隣はJR九州の当時社長、今は会長の唐池さんだ。やっぱりファーストゲストは違うと思わず頬が緩んだ。

渡されたアンケートに驚いた。開くとクルーの顔写真が載っていて、お気に入りの人を二人選べとのこと。ななつ星の旅がクルーのおもてなしを大きなウリにしていることの強い意思を感じる。結果、一位は我603号室を最初に案内してくれた原尻さんだった。日テレ「真相報道バンキシャ」での映像にその時の場面が残っていて、度々見ているので彼女の笑顔を忘れることはない。

そしてお次の質問は「最も気に入っていたこと」2つを選択。



小生のNo.1は何と言っても車窓から見た皆の歓迎の旗降りや駅を降りてのおもてなしイベントだ。初便ということもあって、芸能人を超えて天皇陛下になったぐらいの歓迎ぶりだったからだ。生涯において二度と体験することはないだろうと思わせてくれた。アンケートの結果は水戸岡鋭治さんの究極のこだわりのデザインの車両が第一位、第二位はクルーのおもてなし、三位に沿線の出迎え、そしてバイオリンとピアノの演奏、料理と続いた。

これまで5548人が乗り、この同窓会には409人が出席。1割弱の人が全国から集った。あのななつ星がどんな同窓会に仕立てあげてくれるのか、大きな期待を皆持って集まってきたのだと思う。

席に着くとまずは、バイオリンとピアノでななつ星のテーマミュージックが演奏された。旅の気分が高揚する実にいい曲だと思っている。そして、想いでの写真が次々に写し出される。

いよいよ青柳社長の挨拶だ。「列車を降りられた先に続くこれからの皆さまの旅が、より輝かしく祝福されたものでありますように、そしてななつ星とともにまた皆さまとめぐり逢う日を心よりお待ち申し上げます。」と挨拶を締められた。

宴のスタートは、ななつ星で出されているロゼタイプのスパークリングワインで乾杯。乾杯の後にされる料理がやっぱり期待を裏切らない。福岡No.1のやまなかの寿司だ。大将も参上して会場に屋台を用意して次々に握ってくれる。ななつ星で最初に出されるのも、やまなかのその場で握る寿司だ。

テーブルでは、当時の話が盛り上がる。隣の河合さんはデラックススイートホームのお客だった。奥さん曰く「私たち一番のクレマーだったんじゃないかしら。ベッド脇に耳栓が用意されているので何だと思ったら、ゴトゴトやかましくて寝れやしないことへの対応だったようだけどダメで、結局マットレスを列車外での観光中に入れ替えたという離れ業でJR九州は対応してくれたのよ。」

降りるときには列車がいとおしくて、拭き掃除してきたとのことだった。(つづく)

